

## 否定応答辞 NO の話し言葉コーパス分析

深 谷 輝 彦

Notes on Negative Response Form *No* in English Conversation

Teruhiko FUKAYA

### 0. はじめに

疑問文に応答する語としての yes と no は、中学 1 年生英語教科書の第 1 課に登場する。「はい」、「いいえ」という訳語とともに、

- (1) a. “Excuse me. Are you Ms. Green?” “**No**, I’m not.” “I’m sorry.”  
b. “Excuse me. Are you Ms. Green?” “**Yes**, I am.” (*New Horizon* 1: 16–17)

という例文で提示される。さらに、no の発展的用法として、上記教科書は後半の課で、驚き表現 Oh, no! や断り表現 No, thank you と決まり表現を導入する。

本稿では、否定応答辞 no に注目する。まずこの語に関する先行研究で重要なものを要約する。次に現代英語コーパス The British Component of The International Corpus of English の会話部門を利用して、否定応答辞 no の働きを調査報告する。話し言葉コーパスのなかで、英語教科書にはみられない no の元気な姿を描くことを目標とする。質問に対して否定的に答える、反対するという no のプロトタイプ的あるいは中核的用法から、自問自答しながら談話を進める周辺的な用法までコーパスを丹念に読み込む。その際に、会話という伝達媒体の性格により no の分布が規定されているという事実を示す。

### 1. 辞書、語法書、文法書の記述

No の働きを探る出発点として、類書に比べて最も包括的な COBUILD<sup>3</sup> (2001) の定義を引用する。

- (2) 1. You use **no** to give a negative response to a question.  
‘Any problems?’—‘No, I’m O. K.’  
‘Haven’t you got your driver’s licence?’—‘No.’  
2. You use **no** to say that something that someone has just said is not true.

- 'We thought you'd emigrated.'*—*'No, no.'*  
*'You're getting worse than me.'*—*'No I'm not.'*
3. You use **no** to refuse an offer or a request, or to refuse permission.  
*'Here, have mine.'*—*'No, this is fine.'*  
*'Can you just get the message through to Pete for me?'*—*'No, no I can't.'*  
*After all, the worst the boss can do is say no if you ask him.*
4. You use **no** to indicate that you do not want someone to do something.  
*No. I forbid it. You cannot.*  
*She put up a hand to stop him. 'No. It's not right. We mustn't.'*
5. You use **no** to acknowledge a negative statement or to show that you accept and understand it.  
*'We're not on the main campus.'*—*'No.'*  
*'It's not one of my favourite forms of music.'*—*'No.'*  
*'I don't know him, do I?'*—*'No, you don't.'*
6. You use **no** before correcting what you have just said.  
*I was twenty-two—no, twenty-one.*
7. You use **no** to express shock or disappointment at something you have just been told.  
*'John phoned to say that his computer wasn't working.'*—*'Oh God no.'*  
*'We went with Sarah and the married man that she's currently seeing.'*—*'Oh no.'*

中学一年生の教科書の例を COBUILD<sup>3</sup>の意味と照合すると、(1) が「疑問文に対する否定応答辞」である (2-1) に、Oh, no が「精神的打撃や落胆」を表す (2-7) に、最後に No, thank you が「申し出や誘いを断る」意味の (2-3) にそれぞれ対応する。

No のさらなる用法として、小西 (1989) や「ランダムハウス」(1994) は (3) をあげている。

- (3) 1. 相手の言葉をさえぎる働きをすることもある。  
*"If you—" "No wait, wait."*—Webb, *Graduate*
2. 次のように脅迫に反論する場合にも用いられる。  
*"You move another inch and I'll drill a hole in that pretty little belly button," he said gutturally. "No, you won't," she said with more courage than she felt.*—Goff & Roberts, *Angels #2* (小西 1989: 1220)
3. notやnorを伴い否定の陳述を強める。  
 Not a single person came to the party, **no**, not a one. (ランダムハウス: 1834)

但し、(3-2) は (2-4) つまり聞き手にその行動をとらないようにいう用法の一部と解釈することも可能である。

語義 (2-1) 二番目の例文にみられる否定疑問文と no という答えは、日本の辞書、語法書がしばしばとりあげる。その理由は、no が「はい」に、yes が「いいえ」に相当するという意味的対応の交差が日英語の間で生じるからである。しかし、田桐 (1970:334) によ



yes より高頻度である点, yeah の頻度は群を抜いている点を再度確認しておきたい。

もう一つの頻度情報を引用しておく。Burdine (2001) は、聞き手との意見の不一致を示す標識や構文21例の頻度表を作っている。そのうち、50回以上の生起数を示す表現を、頻度数とともに列挙する。

(7) Disagreement Markers in the Corpora (in descending order of total frequency)	
No	2551
Don't think X	514
Concern	408
That's not X	107
Don't see X	80
Problem	66
Don't believe X	53

(Burdine 2001: 200)

この表から、次の二点が読みとれる。意見の不一致を示すために、英語は多様な表現を準備しており、文脈に応じて話者が使い分けている。no や not を使って不一致を直接示すものから、聞き手が不一致を推論するものまである。その一方で、no の頻度数が語るの、不一致標識の代表選手はやはり no である点である。

以上では、no の用法および頻度について、先行研究を略述した。以下では、話し言葉コーパスから250例の no を詳細に分析した結果を報告する。

## 2. コーパス資料を利用した no の分析

分析の対象としたのは、The International Corpus of English, The British Component である。このコーパスは現代イギリス英語約100万語の文法分析及びタグ付きコーパスで、内訳は60%が話し言葉、40%が書き言葉である。このコーパスの詳細は、  
<http://www.ucl.ac.uk/english-usage/>

を参照されたい。なお、以下ではこのコーパスを ICE 英語コーパスと称する。

以下の英語話し言葉コーパス分析では、次の三つの疑問をとりあげる。

- (i) no だけで答えるとぶっきらぼうか。
- (ii) 談話を推進する no とは何か。
- (iii) no の再確認用法とは。

(i)については、反論をこころみる。(ii)と(iii)は、従来あまり注目されてこなかった no の用法を例証することにする。

### 2.1 「no だけで終わるとぶっきらぼうになる。」

英語の辞書、語法書をみると、no について時々上の記述に遭遇する。そしてそれを支持するかのように、辞書があげる no の例文は

- (8) a. “Will you go out?” “**No**, I won't.”
- b. “Can't you play tennis?” “**No**, I can't”. (ランダムハウス:1834)

というタイプが圧倒的で、no だけで答えていない。中学生用教科書の例文 (1) もそのとおりである。もちろん英語話者の文法直観に照らしても問題ない。

しかし、(8) のタイプの答え方はどの程度の頻度で実現するのだろうか。否定応答辞 no を 250 例で調べてみると、No + 代名詞 + 助動詞 + 't というパターンはわずかに 13 例しかみられない。この傾向は、ICE 英語コーパスに含まれる約 2000 例の否定応答辞 no でも同様である。

では、「ぶっきらぼうだ」とされる no の単独用法はどれくらいの頻度か。27 例である。250 例中の約 10 % の頻度である。「ぶっきらぼうだ」から英語話者がその使用を避ける、それゆえ頻度が低いといえそうである。しかしこれらの単独用法は、単独で現れるそれなりの理由を持っているようである。まずあいづち的に挿入される no の用法が観察できる。以下の ICE 英語コーパスからの実例では、no を含むターンの ID を括弧で示す。

- (9) A: I don't know what else I'll go to though  
 B: **No** (sla-005 073)  
 A: Because the thing is I'm going to be absolutely knackered

この例の場合、A の発話は 1 行目と 3 行目が継続しており、B の no は返事として答えたと言うより、合いの手を軽くさしのべたと言える。あいづちだからこそ、no と軽く一単語言うべきであって決して長々と続けるべきではない。

もう一例 no の単独用法で、それなりの動機づけをもつ例をみることにする。

- (10) A: Have you uh  
 C: No uh I didn't see it  
 B: **No** (sla-016 159)

(10) は、A が B, C にインタビューするという場面である。したがって A が質問を継続的に供給し、B, C は基本的に自分本位に答えればよい。したがって yes, no だけの答えだけでも十分許される。加えて、(10) では、C が最初に答えてしまい、B は自分もそうでないと言う以上の情報を持ち合わせていないようである。したがって no とだけ答える結果に至っている、と解釈できる。

それでは、残り 200 例余りの no の例文では、どのような文法パターンが活用されているのだろうか。no に後続する頻出文法パターンを列挙する。

- (11) a. No because  
 b. No but  
 c. No I don't know  
 d. No I don't think so  
 e. No I mean  
 f. No well

いずれの表現も、no が意味する否定あるいは不一致をすこしでも和らげようという話者の意図が読みとれる。いくつか実例を引用して no をいう話者のストラテジーを追ってみる。

(12) C: I thought you were talking about the RAF

B: **No** I mean I've had to do that as well (sla-030 081)

(12B) の話し手は no と一度否定をした後、I mean と続けて真意を I mean で伝えようとしている。no で生じた話し手 C との不一致をすこしでも緩和するべく、I mean 以下でさらなる情報提供を行う。類似の働きをするのが、(11b) の no but である。

(13) A: Will that be full-time

B: **No** but it pays what I would call a part-time wage (sla-011 019)

B の話し手は、「full-time でない」と no で伝える。しかしそこでとどまらずに、but 以下で a part-time wage が支払われるという、A にとって有利な情報を伝える。but 以下が no で生じた不一致を修復している。

英語話者は、no と言う前に、不一致軽減のストラテジーを講じておくこともある。

(14) A: How much could you afford

B: Uh I don't know. **No** nothing really. I'm I've got too many debts (sla-015 043)

(15) A: But does he does he not just like write for himself

B: Internally driven I meant **no** he is not no. (sla-015 150)

(14B) にみられる no の導き方も巧妙である。最初に I don't know という緩和表現で布石を打つ。そしてその後に no という。(15B) では、話し手が no の言う前に、Internally driven I meant とその範囲をあらかじめ絞り込んでいる。その結果、no の衝撃の範囲が狭まる。

「no で終わるとぶっきらぼうになる。」という記述は精度に欠けることを示していた。No + 代名詞 + 助動詞 + not の縮約系というパターンは予想より頻度が極端に低い、no 単独で答えることも文脈上要請があれば十分可能である、さらに英語話者は、no の後に言葉添えて否定や不一致を和らげようと努力している、という点を例証した。

## 2.2 談話を推進する no

COBUILD<sup>3</sup> は、(2-6) で話者が自分の発言を途中で訂正するために no を発するという用法をあげる。類例をコーパスから簡単に引用できる。

(16) A1: Sort of like jargons slangs

B: Sort of yeah

A2: Yeah **no no no** it's a completely different la language (sla-015 215)

(16A2) は、no no no を用いて A1 を訂正し、全く別の言葉だと主張している。つまり no の

訂正用法が生じる環境として、no の前後が異なる意味を表す必要がある。ところが、コーパスの中には、訂正用法に似て非なる no を含む例文がみられる。たとえば (17) である。

- (17) B: Well I mean there's **no** you're not restricted in any way **no** it doesn't do compression  
(sla-029 023)

(17B) には二つの no がみえる。最初の no はいわゆる訂正の no といえる。there's を言い直して you're で文を始めるために、訂正の no を用いている。問題は二つ目の no である。no の前後で異なることを言っていれば、訂正用法と分類できる。しかし、(17) を読む限り、訂正というより前に述べたことをさらに説明している。no に先行する文脈で否定を含んだ意味が実現し、それをさらに展開する役目を no が果たしているようである。この no の使い方を談話推進用法と呼ぶこととする。

この談話推進用法には、(17) のように一人の話者が自らの発話の中で no を用いて、発話を前に、前にと進めるケースがある。類例を追加する。

- (18) B: Actually it's not a small garden **no** it's not small it's quite big a small house though  
(sla-025 138)

この例でも no の前後で発言が変更されたということではなく、no の前の部分を後で敷衍している。そういう意味で、話者が自分の発言をさらに継続する合図になっている。(17)、(18) のようにモノローグのなかで、談話を推進するために no を使う用法に加えて、ダイアローグのなかで自分のターンを no で始めることで談話推進を図る例もある。

- (19) A1: If you took the the Balda did you need flash  
B1: No I load up with the fast film  
A2: Mm oh  
B2: **No** I don't like using flash (sla-009 145)

当該の no は、B2 の文頭にある no である。明らかに B1 と連続し追加説明となっている。A2 が B2 の no を聞いたとき、前の発話つまり B1 に関連させて聞く構えをとる。このようにダイアローグ上にある談話推進の no は、談話を勧めると同時に前のターンとの結束性を産むという働きも見逃せない。

談話推進の no の仲間にもう一つ含めたいのが、あいづちとしての no である。no の単独用法としてすでに (9) として紹介済みであるが、さらに追加例をみることにする。

- (20) B1: Nothing's ever happened about it.  
E: **No** (sla-007 287)  
B2: I mean they surely they don't keep hold of everybody

もちろんこの no の基本的意味は、COBUILD<sup>3</sup> の定義 (2-5) すなわち “You use **no** to acknowledge

a negative statement or to show that you accept and understand it.”である。しかし、(20E)ではその意味が拡張されて、あいづちとして挿入されている。つまり、このnoの機能は、B1を受容しつつさらにBの発言を促す、まさに談話推進にあるといえる。その証拠に、B2はEの談話促進あいづちを聞いて、さらにI meanで自説を展開している。

noが否定、不一致という意味を少し捨て去り、むしろ発話、談話を前進させるマーカーとして働く。それにはモノログ型とダイアログ型があり、さらにあいづち型も入る。

### 2.3 noの再確認用法

小論では最初に中学校英語教科書の例文を引用した。以下に説明の都合上(1a)を(21)として再度引く。

(21) A1: Excuse me. Are you Ms. Green

B: No, I'm not.

A2: I'm sorry.

会話の単位として、“Thank you” “You're welcome.”のような隣接対(adjacency pair)に加えて、(21)のような三つの発話が組になる三部形式がある。A1が質問をする、Bが答える、A2が最後に一言追加する。この三部形式がnoの分布を広げている現象を以下で見る。

ここで取り上げたいnoを含む三部形式とは次のような例文である。特に注目したいのは、A2のnoである。

(22) A1: Anyone doing anything in Wolfson House in the acoustics bit

C: I don't think so

A2: No (sla-014 263)

A1はCの答えを聞くことにより、自分の質問に対する答えがnoであることは簡単に推論できる。ところがA2でそのわかりきったnoをわざわざ発話している。別の言い方をすれば、A2の発言は新情報としての価値はなく、単にCの“I don't think so”を再確認しているだけである。ではなぜA2はnoと再確認をとっているのだろうか。

第一に、(21)が例証している会話の三部形式が関与していると考えられる。Cのところで会話を終わることも可能であるし、そういう実例も多い。他方、(21)が示す会話のまとめ、あるいは安定感こそが三部形式会話の魅力である。その魅力にとりつかれるかのように、A2はnoと言いたくなる、と説明することができる。第二の理由は、話し手、聞き手の間の共感(rapport)の共有にあるだろう。Cの否定的発言の直後に質問者Aがnoと発話すると、その結果としてCとAは同じnoという答えを共有しあっているという共感を形成できるようになる。会話の目的は単に情報の交換だけでなく、人間関係の形成にある点はいうまでもない。そして人間関係づくりの基本は共感の共有が出発点である。

共感形成が関与していることを示す証拠として以下の(23)と(24)の対話を検討する。

(23) B1: Actually it's strange you know so many people just don't bother to stop anywhere else



for those

C: <laugh> <laugh> No I don't for those

B2: **No no** not for those <laugh> (sla-17 333)

(23) でまず注目したいのは、C が笑いながら B の質問に答えたのに対して、その笑いに呼応するように B2 は no で C を再確認し笑う。この笑いの交換こそが、同じ答えを共有しているという共感を産んでいることを物語っている。もう一例 (24) は、再確認していることをはっきりと示している。

(24) E1: Not worth it is it

C: No

E2: Certainly wasn't worth it **no** (sla-020 027)

E2 では、E1 で自らがした質問文を繰り返して、その後に C の no に対応する no が起きている。こうしてみると、E1 と C がそのまま E で再生されている、つまり再確認という働きが行われている。

no を利用した再確認による共感の共有が最もすすんだ形で実現している例を最後に紹介する。再確認作業が二重に行われている後半に注目したい。

(25) B1: Do men always like to stick to one shop for their Y-fronts

A1: Uhm no

B2: I wonder if they actually **no** they don't

A2: **No** I do vary (sla-17 368)

これまでの例は、(25) の B2 止まりであった。ところが、(25) では A2 がさらに追加されて、A1 と言い換えている。質問者と回答者それぞれが再確認を行う四部形式の会話が成り立っている。会話の余剰性をみごとに語っている例だといえる。

本小節では、no が回答者の答えを再確認することを示した。同じ答えを持っている点を確認することで共感度を高める、そのために no を質問者が繰り返すという用法が生まれている。しかし、会話構造からすれば極めて自然な no の使用法の一つである。

### 3. まとめ

本稿は no の用法について、辞書の記述をまず整理することから議論を始めた。また、先行研究の成果の一部として、yes や yeah と比較しながら no の頻度をグラフで示した。次に、ICE 英語コーパスの話し言葉構造のなかで、no がどのような振る舞いを見せるか、考察した。中学英語教科書で習う「no + 代名詞 + 否定縮約形付き助動詞」は、予想外に頻度が低い、no 単独用法も動機づけがある、no に後続する頻出パターンには否定のショック軽減効果があると論じた。最後に、従来あまり指摘されなかった no の談話推進機能、再確認機能を例証した。

最後に今後の研究課題にふれておく。今回は no に限定した議論を進めてきたけれども、すぐ思いつくのが、no の対極にある yes ではどうなのだろうか、という疑問である。COBUILD<sup>3</sup>の yes の項を見る限り、no とパラレルなあるいは反対の用法がほとんどあるが、話しコーパスで丹念に検証する価値がある。もう一つ課題をあげると、Burdine (2001) がすでにその端緒をつけたように、たとえば不一致という意味体系全体を描いた上で、no の位置を特定する作業が望まれる。言い換えれば、no の前後に共起し、統合関係にある表現及び no と意味的に系列関係にある表現のコーパス調査が必要である。

### References

- Bald, W.-D. (1979) "Some Functions of *Yes* and *No* in Conversation." Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (eds.) *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*. London: Longman, 178–191.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan (eds.) (1999) *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow, Essex: Pearson Education.
- Burdine, Stephanie (2001) "The Lexical Phrase as Pedagogical Tool: Teaching Disagreement Strategies in ESL." Rita C. Simpson and John M. Swales (eds.) *Corpus Linguistics in North America*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 195–210.
- 小西友七 (編) (1989) 『英語基本形容詞・副詞辞典』東京：研究社
- 小西友七, 安井稔, 國廣哲彌, 堀内克明 (編) (1994) 『ランダムハウス英和大辞典 (第 2 版)』東京：小学館 [ランダムハウス]
- Leech, Geoffrey, Paul Rayson and Andrew Wilson (2001) *Word Frequencies in Written and Spoken English based on the British National Corpus*. Harlow, Essex: Pearson Education.
- Sinclair, John (2001) *Collins COBUILD English Dictionary for Advanced Learners*. Glasgow: HarperCollins. [COBUILD<sup>3</sup>]
- 田桐大澄 (編) 『英語正用法辞典』東京：研究社